

2009/05/4 13:00～14:00

（内容）

- ・座繰り器による糸づくり
- ・精練した繭からのずり出し糸づくり
- ・つくしによる真綿からの糸づくり

～座繰り用の仕込み～

（煮繭）

座繰り器で糸を巻き取るために、繭を煮て、繭の糸口をとる。

セリシン（繭糸をくっつけている物質）をやわらげてほぐれやすくする。



- ・毛羽（けば）取り

乾繭（市販）の毛羽を手で取りながら、選別および数を数える。汚い繭はづりだし用に回す。

※繭・・・1000～1500 m／1粒

※座繰り器では、大体20粒を1本の糸にする。

常に20粒の太さを保つ。

（繭の大小での調整する）

煮繭は、90～100粒を1セットで行いました。

『座繰り用』

1. 沸騰しているお湯、**65℃**のお湯、**45℃**のぬるま湯を用意。
2. 乾繭 100粒を煮繭器に入れ、そのまま沸騰しているお湯につけると、、一度温度が下がるので、加熱しながら98℃へもってゆく。



※この時、繭にお湯がしみこみ気泡が出る。



3. 98℃になったら、1分保持！！ グツグツ煮ます。



4. 98℃で1分保持したら、、、そのまま 65℃のお湯へ敏速に移して、1分20秒保持。



5. 次に、煮繭器から沸騰したお湯に出して、落とし蓋をして（鍋の大きさとほぼ同じ位の金網の蓋）、98℃のお湯で3分保持。全部の繭がお湯の中に完全に浸かることがとても大事！！



※右の写真の落としブタ（代用のざる）は鍋に比べて少し小さかったのが苦戦しました。

6. 98℃のお湯の中で、落としぶたをとって、おたまの底でトントンと均一に叩く。1分程度しまーす (97℃くらい)。この時、糸口の出ている繭は、糸口を確保しましょう。



※ここで潰れてしぼんでしまった繭は使えません。

7. 火を止めてからさらに 1 分放置します。

8. 最後に、セリシンを安定化させるために 45℃のお湯に 15 分以上浸します。

9. 緒糸（くちいと）を単繭になるまで引きます。

※洗濯バサミを有効に活用しましょう。



10. 座繰り器にセットして、繭の数（20 粒）と糸の太さに注意しながら木枠に巻いていきます。さなぎになった繭は取り除き、次々と足してゆきます。



11. 20 粒の座繰糸を 8 本にして、” 撚り（より）” をかけ（撚糸工場に出すみたい）、生糸（きいと）にしま〜す。20 粒の生糸を 8 本で撚った場合には、160 粒の繭が 1 本の太さになるそうです！！！！

『繭の精練』

1. 布袋に 250 粒（約 250～300 g）の乾繭を用意。ぬるま湯に浸して吸水しましょう。
2. 9 L（300 g × 30 倍）を 70℃に沸かす。
3. 70℃のお湯 9 Lに、重曹を 27 g（3wt%の重曹水）入れてよく溶かす。
4. 布袋に入れて、ぬるま湯に浸しておいた繭を投入し、中蓋で押さえ、沸騰するまで加熱。繭が湯の中で浮き上がらない様に（水面から 2cm 位沈む）重石をする。
5. 沸騰した重曹水で 20 分グツグツ煮る。20 分後に天地返しをして、さらに 20 分グツグツ煮る。



※煮ている間は、いつも一定に沸騰しているように火加減を調節する。

6. 50～60 分たったら火を弱め、袋から 2～3 粒取り出し、水の中で繭を掌にのせて叩いてみる。繭層がムラなく一様に広がれば煮あがり！（広がりが悪ければ状態を見て煮る or 蒸らす。）
7. 水の中でさなぎや脱皮殻を取り除きながら手に掛けて広げる（のばし）。
8. 風通しの良い日陰で干す。

<展示・体験の様子>

1 F



3 F





族（まぶし）…蚕の部屋が並んでまとめられたもの

木杵、揚げ返し器等の器具展示



繭、お礼、文献

揚げ返し機



作品展示

糸づくり体験の様子